

● 東京言語研究所 2020 年度春期講座

		課目 (講師)
【1日目】 4月18日 (土)	1限	言語学入門 (大津由紀雄)
		日本語文法：日本語のモダリティ序説 (川村 大)
	2限	語の意味論：動詞「見る」から人の知覚行為について考える (松本 曜)
		社会言語学入門 (嶋田珠巳)
3限	言語心理学 (佐野哲也)	
	音声学：言語音の多様性を理解するために (中川裕)	
4限	認知言語学Ⅰ：文法と意味 (西村義樹)	
	文法原論 (梶田 優)	
【2日目】 4月19日 (日)	1限	言語学概論：Popular Linguistics を目指して (長屋尚典)
		実験音声学 (北原真冬)
	2限	認知言語学Ⅱ-認知言語学から文化記号論へ：＜言語＞と＜文化＞の問題をめぐって (池上嘉彦)
		生成文法入門 (高橋将一)
3限	形態論・語形成論：語の主要部と意味の関係 (杉岡洋子)	
	日本語文法研究入門 (三宅知宏)	
4限	日本語文法理論：「なぜ」を問う言語学 (尾上 圭介)	
	語用論 (酒井智宏)	

1限 (10:00~11:20)

2限 (11:40~13:00)

3限 (14:00~15:20)

4限 (15:40~17:00)

18日 (土)	言語学入門 大津由紀雄（明海大学教授／慶應義塾大学名誉教授）
	<p>言語学「概論」ではなく、言語学「入門」と銘打たれた、この講義は、理論言語学について知りたいと思っている方々に理論言語学のおもしろさや楽しさを感じてもらうことがその狙いです。主として、日本語と英語からの例を引きながら、理論言語学が狭い意味での「ことば」の研究に留まることなく、人間の本質に迫る研究プロジェクトであることをできるだけわかりやすくお話しします。</p> <p>なお、今年度の理論言語学講座では、「言語学特殊講義」（前期）と「言語学入門」（後期）を担当します。「言語学特殊講義」では「古典から言語心理学（psycholinguistics）の現代的課題を考える」と題して講義します。前半（言語獲得）は Carol Chomsky. 1969. <i>The acquisition of syntax in children from 5 to 10</i>. MIT Press を、後半（言語理解）は John Kimball. 1973. “Seven principles of surface structure parsing in natural language.” <i>Cognition</i> 2, 1, 15-47 を議論の出発点とします。理論言語学に関する知識はできるだけ前提とせず、わかりやすく講義をします。受講にあたって大切なのは知的好奇心です。</p>
	日本語文法：日本語のモダリティ序説 川村 大（東京外国語大学教授）
1 限	<p>標題の「モダリティ」は、研究者によって中身が大きく異なりますが、春季講座の範囲では、「意志・推量などを表す形式」のことだとお考えください。（この用語をめぐる詳しい検討を本編で行う予定です）</p> <p>5月から始まる講義の問題意識について、動詞につくいわゆる助動詞「う・よう」を糸口にいくつかの話題を取り上げたいと思います。</p> <p>学校教育では、「う・よう」は「意志」や「推量」を表すといいます（ほかの意味も指摘されることがあります）。けれども、</p> <p>① 「う・よう」が（少なくとも）「意志」「推量」という2つの意味はどのような関係にあるのでしょうか。話し手がこれから自分である行為を実現することを欲するということ（意志）と、物事がこれから起きると予測すること（推量）とは、同じ人間の心の営みだとはいえ相当に異なります。</p> <p>② 「う・よう」はしばしば話し手の発話時の態度を表す形式だ、と言われることがあります。「意志」や「推量」を表す場合は、そういう理解で間違いありません。しかし、やや古くて固定化した言い方ですが、「雨が降ろうが槍が降ろうが」「たとえ何があろうとも」「川村先生ともあろう人が」などの場合の「う・よう」は「話し手の発話時の態度を表す形式」だとは言えません。</p>

	<p>③ 「今日大学に行こうかなあ」という時の「う」は「意志」を表すと言いますが、もしこの発話が「意志の疑問」を表しているとする、話し手は「学校に行く」ことを意志しながら、そのことについて「そうなのか疑問だ」と考えていることになります。それはおかしいことではないでしょうか。</p> <p>④ 同じ「意志」を表すと言っても、「つもりだ」が「意志」をあらわすのと「う・よう」が「意志」を表すのとでは、起きていることがずいぶん異なりそうです。また、「ようだ」「らしい」「かもしれない」「にちがいない」も「推量」を表すと言われることがあります、これまた「う・よう」が「推量」を表すのと起きていることがずいぶん異なりそうです。</p> <p>これらのことについて適切な解決を与えることを目指しながら、「う・よう」が実際のところ何をやっているのかについて考えてみたいと思います。</p>
2 限	<p>語の意味論：動詞「見る」から人の知覚行為について考える 松本 曜（国立国語研究所教授）</p> <p>言語はそれを使う話者の世界認識を反映していると言われます。そのような立場から単語の意味を分析すると、どのようなことが分かるのでしょうか。この講義では、日本語の「見る」という動詞の意味用法に、人が知覚行為をどのように理解しているかが反映していることを明らかにします。考察するのは「見る」が参加する複合動詞の用法や、「見る」が派生させている副次的な意味です。たとえば、「見る」は「見上げる」「見下ろす」などの複合語を作りますが、「見上げる」というとき、何を上げているのでしょうか。あるいは「見落とす」というとき、何を落としているのでしょうか。そのことを考えると、「見る」には〈目〉や〈視線〉を動かす行為という側面があること、また、私たちは知覚対象を見ることを、物体を操作するような行為として捉えていることが分かります。また、「見る」は様々な意味を派生させています。「患者を見る」では〈診察する〉、「(盗まれないように)旅行カバンを見る」では〈監視する〉の意味で使われます。このような意味の派生は、私たちがどのような目的で視覚行為を行うのかを物語っています。上記のような考察から、「見る」の背景にある知覚行為に関する理解を知ることができます。このような語の背後にある世界理解はフレームと呼ばれます。この授業では、このフレームという発想が意味の理解をどのように豊かにするかについて考え、前期の理論言語学講座で取り扱う内容の導入とします。</p>
	<p>社会言語学入門 嶋田珠巳（明海大学教授）</p> <p>「言語学」の前に「社会」が付いて、「社会言語学」。言語学のすこし厳格なイメージも、「社会」言語学になるとどこことなく人間味が加わったようで、とっつきやすさを感じるでしょうか。それとも、「社会」が入った分、実際のところはもっと複雑になる、などということもあるのでしょうか。</p> <p>そもそも、ことばは人が話すもの。その話者のいるところ、属している集団、社会、コミュニティ。言語を理解するのに、いちいち人を、いちいちコミュニティを意識せずには始まらない。社会言語学のおもしろさはそういっ</p>

	<p>たところから展開されます。</p> <p>この講義では、社会言語学とはどのような学問領域かを概説したうえで、とくに私がこんなところが楽しい！素晴らしい！と思っているようなことを取りあげたいと思います。今年度の理論言語学講座「社会言語学」では、後期に「社会言語学の〈社会〉の意味を探る」というテーマで講義を担当します。「話者の見える言語学」としての社会言語学の魅力を春期講座でも感じていただけたらと思います。</p>
3 限	<p>言語心理学</p> <p style="text-align: right;">佐野哲也（明治学院大学教授）</p>
	<p>今年度の春期講座では、第一言語獲得研究のなかで発達にかかわるいくつかの代表例を紹介します。</p> <p>こどもの言語発達を観察すると「初期には大人の場合と異なるもの」がみられることがあります。</p> <p>こどもが通常第一言語を容易に獲得することを考えるとこどもには生まれつきの言語能力が備わっていると考えられますが、それにもかかわらず「初期には大人の場合と異なるもの」が観察されるのはなぜなのか、というのが第一言語獲得研究のなかで発達にかかわる一つの大きな問いになると考えられます。</p> <p>今年度の春季講座「言語心理学」では、この問いについての諸研究を整理して紹介します。これは「言語心理学」研究の興味深い一例になりますので、今年度の「言語心理学」受講への橋渡しにもなると考えています。</p> <p>具体的なトピックとしては、英語の動詞屈折語尾の獲得、日本語の助詞「が」「を」「の」の獲得、にみられる発達の遅れをとりあげる予定です。これらの現象について、仮説をたてて予測を検証することで、ここでとりあげられている発達の遅れの原因について考察します。</p> <p>これらの諸研究から、「初期には大人の場合と異なるもの」がこどもの言語発達において観察されるのはなぜなのかという問いについて、答えの可能性をしばらくこんでいく試みについておはなしします。</p>
	<p>音声学：言語音の多様性を理解するために</p> <p style="text-align: right;">中川 裕（東京外国語大学教授）</p> <p>この講義では、世界の言語音の多様性を理解するための2種類の接近法について分かりやすく講義します。接近法の一つは国際音声記号(IPA)に代表され、もう一つは広域音韻類型論に代表されます。広域音韻類型論の解説の際には、古典的な Maddieson (1984)から最新の研究動向 Everett (2018)までの成果を踏まえます。さらに、広域音韻類型論を補完する新しい音韻類型論の試み「稀少特徴の地域音韻類型論」(Nakagawa, et al. 2019)についても触れます。</p>

	<p>この講義によって、音声学（前期）で訓練する調音音声学的技能は、個々の言語音を単に観察・記述する道具ではなく、言語学という学問領域の発展に貢献するための知識体系の一部であることがわかるはずです。</p> <p>References  Everett, C. (2018) The similar rates of occurrence of consonants across the world's languages: A quantitative analysis of phonetically transcribed word lists, <i>Language Sciences</i>, 69, 125-135.  Maddieson, I. (1984) <i>Patterns of Sounds</i>, CUP.  Nakagawa, H., T. Güldemann, F. Lionnet, and A. Witzlack-Makarevich (2019) Khoisan phonological typology database and the relative frequencies of consonants in the Khoisan languages, 13th Conference of the Association for Linguistic Typology, University of Pavia, Italy.</p>
4 限	<p>認知言語学 I  西村 義樹（東京大学教授）</p>
	<p>準備中</p>
	<p>文法原論  梶田 優（上智大学名誉教授）</p>
	<p>意味の研究が重要な段階にさしかかっています。明示性を徹底的に追求してきた「形式意味論」（明示的な意味研究）が成熟期に入り、実質的な成果を上げはじめています。当初は、ごく少数の言語の、ごく限られた種類の意味領域（述語構造、量化構造、命題論理など）の、内観でも届きやすい比較的浅い層の意味事象を材料として、もっぱら記述の枠組みの明示化・体系化に集中していました。しかしその作業がある程度進むと、そこで得られた枠組み（理論）を、（場合によっては必要な修正を加えつつ）より多様な言語の、より多様な意味領域に適用することが可能になりました。そして、実際、ここ 30 年余りのあいだにその方向での研究が数多く行われ、内観では届かなかった意味の深部の仕組みが少しずつ見えはじめています。特に、一部で見られる言語類型論と形式意味論の合流とでも言うべき動きは、予想できなかったような発見を次々にもたらしており、注目に値します。また、提案された複数の意味理論の優劣の判定に神経科学の成果を援用する試みも、まだ緒に就いたばかりのようですが、将来的には期待できる動きのひとつです。</p> <p>今回の春期講座では、上記のような意味研究の動向を、いくつかの具体例</p>

		<p>によって、概略的に説明します。そのあと5月からの通年講義「文法原論」では、そのような意味研究が文法（特に統語論）の研究とどのように関わり合うか、動的な文法理論の観点から考えます。</p>
19日 (日)	1 限	<p>言語学概論: Popular Linguistics を目指して 長屋 尚典 (東京大学准教授)</p> <p>2020年度私が理論言語学講座で担当する「言語学概論」は、言語学になんとか興味があるがどのようなものかわからない方のために、また、言語学を本格的に勉強したいと考えている方のはじめの一步として、言語学の主要な分野の基本をまんべんなく講義するオーソドックスな入門講座です。</p> <p>春期講座では、その言語学概論への招待として、言語(学)に関心のなかった人の興味もひくような言語学の研究成果を紹介したいと思います。具体的には、「言語学」という学問の存在を聞いたことがあるけれど実際何をやっているかわからないという方を対象に、言語学の基本的な考え方を導入するとともに、言語学を学んだことのない方にも親しみやすいテーマを題材として言語学のいくつかのトピックをとりあげたいと思います。</p> <p>取り上げるテーマは現在のところ次のような比較的最近の研究を考えています(変更の可能性あり)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・狩猟採集民と農耕民の言語の違い</li> <li>・赤ちゃんの泣き声の言語差</li> <li>・映画『メッセージ』とサピア・ウォーフの仮説</li> <li>・話者数の多い言語が単純な文法を持つ理由</li> <li>・世界でもっとも「複雑」な言語</li> <li>・その国で2番目に話者数が多い言語からみた世界の言語地図</li> </ul> <p>このようなトピックから言語学の研究成果を紹介することで、言語研究を一般の方に広く伝える架け橋としての Popular Linguistics を目指してみようと思います。もちろん言語学を勉強したことがある方の受講も歓迎です。</p>
		<p>実験音声学 北原 真冬 (上智大学教授)</p>
		<p>音声分析ソフトウェア Praat を用いて、実験のデザインと実施、そして結果の分析についての概要を示し、自ら音声学的な実験を執り行うための導入の第一歩をお伝えします。今年度の開講科目「実験音声学」ではノートPCとヘッドホンを持ち込んでいただき、各自が手を動かして実際の作業手順を学んでいくことを目指しています。春期講座では、講師側のPCで多くのデモを示す形で講義を行い、実験実習の場面をなるべく具体的にお伝えすることを目標とします。受講者の皆さんがPC等を持参する必要はありません。</p> <p>例えば簡単な音声産出課題を行うには、被験者ごとにランダムなリストを用い、余計なノイズを立てないように気をつけながら、練習セッションと本</p>

	<p>番セッションを行うという段取りが必要になります。産出課題の録音が済んだところでは実験の仕事の 25%ほどが終わっただけで、ここから音声にラベル付けを行い、測定値を得るという時間のかかる仕事が残っています。これらの仕事の中の一つはつまづきやすい部分について特に丁寧に解説します。</p> <p>一方音声知覚実験は、刺激を準備し、被験者の課題をコントロールするプログラムがうまく書きあがれば、仕事の 75%は完了したと言えます。得られた測定値などからグラフを作るのは比較的すぐにできます。春期講座ではいわゆる同定課題(identification task)を例にとり、そのコントロールの仕方を解説します。</p> <p>実験音声学は、これまで実験という手続きにあまり馴染みのない方にとっては非常にハードルが高く感じられるものかもしれません。しかし、さまざまなフリーのソフトウェアが手に入り PC の性能向上やインターフェースの整備も進んだ現在、それほど難しいものではありません。この春期講座を通じてひとりでも多くの方に実験音声学の醍醐味に親しんでいただきたいと願っています。</p>
2 限	<p>認知言語学Ⅱ</p> <p>—認知言語学から文化記号論へ：〈言語〉と〈文化〉の問題をめぐって 池上嘉彦（東京大学名誉教授／昭和女子大学名誉教授）</p> <p>私たちは〈言語と文化〉という言い方をよく見かけたり、聞いたりします。〈言語〉と〈文化〉の関わりは、〈認知言語学〉から見ると、どのように捉えられるのでしょうか。</p> <p>例えば、私たちは外国語で書かれた文章を読んでいる時、なじみのない語句に出会うと、この語句の〈意味〉はなんだろうかと考え込みます。同じように、私たちは異なる文化の根付いた土地を訪れてなじみのない事物に出会うと、その土地の人たちにとってその事物はどのような（文化的な）〈意味〉を持つのだろうかと考え込みます。</p> <p>一般に、ある事物から（私たち自身に関わりうる）何らかの〈意味〉が読みとられるという場合、その事物は私たちにとって〈記号〉（sign）として機能しているという言い方をします。つまり、私たちは日常生活の中で〈言語〉と呼ぶ名前の〈記号〉ばかりでなく、およそあらゆる種類の（文化的な）〈記号〉に取り囲まれ、それらから〈意味〉を読みとりながら生きているということなのです。</p> <p>〈言語〉も〈文化〉も元々はいずれも、人間の〈こころ〉の働き（とりわけ、〈認知〉（cognition）と呼ばれる営み）が生み出したものです。言語学は何よりもまず〈言語〉とそれを使う〈話者としての人間〉の研究に専念しますが、〈言語〉を越えたすぐ向こうには〈ことばらしいもの〉—つまり、（文化的な）〈記号〉—から成るさらに広い世界が広がっているということです。</p> <p>この世界を対象とするのが〈文化記号論〉（cultural semiotics）です。この分野がどのように扱われるのか、いくつかの具体例を紹介してみたいと思</p>

	<p>います。特に取り上げるのは、認知言語学での&lt;アナログ&gt;的な意味処理としての&lt;イメージ・スキーマ&gt; (image schema) の概念とその拡張、それに&lt;相同性&gt; (homology) と呼ばれる概念を作業仮説として利用しつつ、日本文化についてのいくつかの観察を試みます。</p>
	<p>生成文法入門</p> <p style="text-align: right;">高橋将一 (青山学院大学准教授)</p>
<p>3 限</p>	<p>形態論・語形成論 - 語の主要部と意味の関係 -</p> <p style="text-align: right;">杉岡洋子 (慶應義塾大学教授) 2020年4月より同大学名誉教授</p> <p>「形態論」は語(word)の形の変化や成り立ちを扱う分野です。語には、「イヌ」のように分割や分析ができないものがある一方で、「ギャン-泣き」や「食べた-さ」のように複数の要素からなる複雑語もあり、「語形成論」では複雑語の構造がもつ原理や規則性と意味との関わりを研究します。語の特性をどう捉え、語形成規則を文法の中でどう位置づけるかは言語研究の大きな課題です。</p> <p>この春期講座では、後期に担当する理論言語学講座「形態論・語形成論」で取り上げる予定のテーマの中から「主要部」(head)という概念を紹介し、複雑語における主要部のあり方を中心に、語の構造と意味の関係についてお話しします。主要部は統語構造において重要な役割をもち、動詞句の主要部である動詞が前か後ろか(read books / 「本を読む」)によって、英語と日本語の基本語順が異なります。一方、複雑語における主要部は、語全体の品詞を決定する(「弱気」:名詞 / 「気弱(な)」:形容詞)と同時に、意味特性に大きく関与します(「ハチミツ」 / 「ミツバチ」)。しかし、複雑語の中には主要部が無いものや、主要部が一義的に決められないものがあります。たとえば、「宛名書き」は「あてなかき」とも「あてながき」とも読めますが、意味はまったく同じでしょうか。また、「物忘れ」と「忘れ物」の共通点と違いは何でしょうか。これらの説明に主要部がどう関わるのかを含めて、ふ</p>



	<p>だん使っている語に潜む構造と意味の関係の一端に光を当てたいと思います。</p> <p>日本語文法研究入門</p> <p style="text-align: right;">三宅 知宏 (大阪大学教授)</p> <p>①日本語文法に関して、一般言語学(言語理論)の基礎としての知識を得たい方、②日本語文法に関して、日本語教育を行う上での知識を得たい方、③日本語文法に関して、専門的な研究を進める上での知識を得たい方、④日本語、特に文法の分野に関して、知的興味を持っている方。</p> <p>上の①～④のいずれかに該当する方を対象にして、日本語の文法について考える(研究を始める)ことのきっかけになるようなお話をしたいと思います。</p> <p>お話しすると言っても、一方的にこちらが話し続けるのではなく、具体的なデータに基づいて、一緒に考えながら、そして議論しながら、進めます。</p> <p>2020年度の夏期集中講義において、日本語における「文法構文」に関する諸問題を取り上げる予定でありますが、本講義は、それらと関連する、あるいはそれらを考えるための基礎となる情報を提供するという性格もあわせ持っていることを付記します。</p> <p>なお、受講にあたっての特別な知識は必要としません(もちろん、専門的な知識を既に持つ方の受講も拒みません)。また、日本語を母語としているかどうかは問いません。</p>
4 限	<p>日本語文法理論——「なぜ」を問う言語学</p> <p style="text-align: right;">尾上 圭介 (東京大学名誉教授)</p> <p>○肯定文と否定文で「ハ」と「ガ」をめぐる非対称性がある(「2月に雪が降る」vs「2月に雪は降らない」)のは何故か。○主語表示において「～ハ」の方が圧倒的に自然な文(形容詞文)と「～ガ」でも自然な文(動詞文)とがある。何故か。○モノの存在を語る文では存在物が主語として現れる言語(日本語など)と目的語として現れる言語(中国語など)とがある。存在物が主語であるともないとも言える言語(英語など)もある。何故か。そもそも主語とは何か。意味の問題か、統語の問題か、それとも?</p> <p>○文に主語と述語があるのは何故か。○いわゆる受身文では、動作的事態であるのに(動作対象項など)動作主以外のものが事態認識の中核(それが主語の本質)に立てられる。それは何故か。受身文とはそういうものだけでは答えにならない。○可能の文や自発の文でも動作主以外の項が主語になる。それは何故か。</p> <p>○動詞シヨウ形に推量でも意志でもない用法(「あろうはずもない奇跡を...」「校長先生ともあろう人が...」「あろうことかあるまいことか...」「ひとたび走り出そうものなら...」「成功しよう見込みはない」)がある。何故か。推量・意志(・命令)という意味はシヨウ形という形態自身に内在しているのか、それとも? ○「あろうか?」という疑問文述語はありうるのに「あるかもしれないか?」という形はありにくい。何故か。</p> <p>○運動の進行中を表すテイル(「鳥が飛んでいる」と運動の既実現や</p>

実現結果の状態を表すテイル（「とっくに気がついている」「ガラスが割れている」。パーフェクト用法と呼ばれる）がシテイル形という同一形式で実現されるのは何故か。（そんな外国語は聞いたことがない。） ○何語でも、述語にはテンスとモダリティがある。何故か。

○平叙文も疑問文も感嘆文も命令文も、すべて文であると言えるのは何故か。 ○文であるとは、言語行動の問題か、意味の問題か。

—「そういうものだ」で済まさないで、「何故」を問うところから文法の理論的思索が始まります。根源に立ち戻って「何故」を問うところに国語学（日本語学）の真骨頂があります。

語用論

酒井智宏（早稲田大学教授）

グリーンランドと南極大陸の大きさをイメージできるでしょうか？グリーンランドは日本の約6倍(=オーストラリア大陸の約0.3倍)、南極大陸は日本の約37倍(=オーストラリア大陸の約1.5倍)の面積です。メルカトル図法の地図の周辺部に位置する島や大陸については、大きさを具体的にイメージすることが難しいのではないのでしょうか。また、南極大陸に定住者がいないのはわかるとして、グリーンランドはどうでしょうか。首都ヌークの人口は？街並みは？

「語用論」とは「言語の使用を研究する分野」ですが、同時に「言語学のゴミ箱」と呼ばれてきた分野でもあります。この呼び名には(i) 言語学の周辺部に位置する、(ii) いろいろなものが混ぜこぜになっている、という意味が込められています。

たとえば「平叙文は、使用されるかどうかとは独立に、真または偽である」と言われることがあります。本当でしょうか。たしかに「スウェーデンの首都はストックホルムだ」は真実を、「ストックホルムはヘルシンキより北にある」は虚偽を述べており、これらの文を誰が使おうとこの事実が揺らぐことはありません。しかし、「(私は)この猫をストックホルムと名づける」という文が命名儀式で発話されると、「その瞬間に真になる」と言いたくなります。このように、言語には「(使う前は真でも偽でもないが)使った瞬間に真になる平叙文」があります。また、「太郎はストックホルムがヘルシンキより北にあると思っている」は真実でありうるでしょう。ついさっき「ストックホルムはヘルシンキより北にある」という文を使う者は嘘つきだと言いましたが、「太郎は・・・と思っている」の「・・・」の位置で使えば嘘つきになりません。このように、言語には「使い方次第で偽でなくなる平叙文」があります。

この講座では、「言語の使用」が詰まったゴミ箱の大きさと中身を少しだけ測量してみましよう。